

〔魂の配慮〕

恐れるな^{*}

松本敏之[†]

旧約聖書

（ヨシユア記一章一〜九節、新共同訳より）

主の僕モーセの死後、主はモーセの従者、ヌンの子ヨシユアに言われた。「わたしの僕モーセは死んだ。今、あなたはこの民すべてと共に立ってヨルダン川を渡り、わたしがイスラエルの人々に与えようとしている土地に行きなさい。モーセに告げたとおり、わたしはあなたたちの足の裏が踏む所をすべてあなたたちに与える。荒れ野からレバノン山を越え、あの大河ユーフラテスまで、ヘト人の全地を含み、太陽の沈む大海に至るまでが、あなたたちの領土となる。

^{*} 本稿は、二〇一二年六月三日の主日、日本キリスト教団 経堂緑岡教会にて「ルカ福音書による説教」の第六四回目の説教として語られたものに手を加えた原稿である。

[†] MATSUMOTO, Toshiyuki. 一九五八年姫路生まれ。立教大学、東京神学大学大学院、ニューヨーク・ユニオン神学大学にて神学を学ぶ。一九九一年〜九八年、日本キリスト教団宣教師としてブラジルの日本人教会およびブラジル・メソジスト教会牧師。現在、経堂緑岡教会牧師。恵泉女学園中学高等学校講師。恵泉女学園理事。

一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共にいる。あなたを見放すことも、見捨てることもない。強く、雄々しくあれ。あなたは、わたしが先祖たちに与えると誓った土地を、この民に継がせる者である。ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーセが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功する。この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたは、その行く先々で栄え、成功する。わたしは、強く雄々しくあれと命じたではないか。うろたえてはならない。おののいてはならない。あなたがどこに行ってもあなたの神、主は共にいる。」

新約聖書

(ルカによる福音書一二章一〜七節、新共同訳より)

とかくするうちに、数えきれないほどの群衆が集まって来て、足を踏み合うほどになった。イエスは、まず弟子たちに話し始められた。「ファリサイ派の人々のパン種に注意しなさい。それは偽善である。覆われているもので現れないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはない。だから、あなたがたが暗闇で言ったことはみな、明るみで聞かれ、奥の間で耳にささやいたことは、屋根の上で言い広められる。」

「友人であるあなたがたに言っておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持っている方だ。そうだ。言っておくが、この方を恐れなさい。五羽の雀がニアサリオンで売られているではないか。だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない。それどころか、あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまさっている。」

説教

(一) 青年とは

経堂緑岡教会では、六月を青年月間と定めて、青年たちのことを覚えてひと月を過ごします。それで今回は、特に青年の方々を心に留めて、お話をしたいと思います。

青年であるとは、どういうことでしょうか。その特徴のひとつは、人生が前に向かって大きく開いているということではないでしょうか。うしろを振り返るよりも、前に向かって開いている。ですから実際の年齢がかなり進んでいても、その視点が前に向かって開いているならば、その人は青年であると言えるかもしれません。新しいことを始める勇気がある。新しいことにチャレンジしていく心をもっている。

一方で、そのことと裏表ですが、青年にはこれからどうなるのかわからないという不安定さもあると思います。その不安定さが、よいほうに働けば、失うものも少ないので、新しいことにチャレンジしていくことになるのですが、逆に悪いほうに働けば、心を萎縮させ、不安と恐れにつながります。青年には青年期特有の恐れと不安があると思います。

(二) おとなしい最近の青年たち

最近の青年を見ると、おとなしい青年が多くなっているように思えます。一九七〇年前後に起こったような学生紛争というのは考えられなくなりました。上の権威に向かって立ち向かっていくことがありません。恵泉女学園中学・高校の校長であられた佐伯幸雄先生は、在任中、経堂緑岡教会に連なっておられました。校長をおやめになる時に、教会の祈禱会で、「人生八〇年を振り返って」と題して証をしてくださいました。佐伯先生が、その中で同志社教会時代のことを振り返ってこう語られました。

「当時、まだ七〇年大学紛争の余韻が消えていないころでしたので、『自分たちは「礼拝に不参加」という形で参加

する』と称しながら、礼拝の時間に、別の部屋で自分たちの集会をもっていた学生・青年のグループが活発に活動していました」。

その方向性があっていたかどうかは別問題ですが（恐らくあっていないと思いますが）、少なくともそういう気概があった。今の時代だと、「自分たちは『礼拝に不参加』という形で参加する」などということがあっても、ただそっこのほうが楽だからということになるのではないのでしょうか。社会の不正に向かって立ち向かっていく青年というのは、教会の内外を問わずほとんど見かけません。

原発反対運動のデモ行進などを見ても、年配者（しかも女性）が中心です。かつて六〇年代、七〇年代に青年であった方々でしょうか。社会の不正を問う、というのも、この世代の方々が中心です。若者はどこへ行ってしまったのか。そんなことに興味すらない。はっぱをかけてみても「面倒なことにはかかわりたくない」というのが日本の現代社会の特徴ではないでしょうか。

これは、牧師の世界においても、そういう傾向があるように思います。そもそも牧師になりたいというような熱い思いを秘めた青年が少ない。安定志向です。しかも神学校でさえも、そういう安定志向の人が多く、おとなしいです。神学校の学生や若い牧師たちを見ているととてもおとなしいし、上の権威に対してきわめて従順です。ただその権威を守ろうとする時には、突然強圧的になることもあります。これはこれで恐れや不安の裏返しなのかもしれません。「下手なことを言うと、いい任地を紹介してもらえない。いい子にしていよう」ということになる。あるいは本能的に従順になっってしまったのかもしれない。

（三）聖書の「恐れるな」には根拠がある

聖書は私たちになんと言っているのでしょうか。聖書の根本的なメッセージのひとつは「恐れるな」ということだと思っています。しかも聖書は無責任に「恐れるな。ひるむな」と言うわけではありません。「がんばれ」という言葉も、励ますつもりが、かえってプレッシャーをかけることもあります。東日本大震災の後、「がんばれ、日本！がんばれ、東北！」

というのが合言葉のようになりましたが、その意味では疑問があります。しかし聖書の語る「恐れるな」というメッセー
ジには、根拠があります。

ヨシユア記冒頭の言葉は、神がモーセの後継者であるヨシユアに向かって語られた言葉です。モーセは、誰もが認め
る大指導者でありました。誰がその後継者になっても、モーセのようなわけにはいかなかったでしょう。そして「自分
はモーセ先輩のあとを継げるような器ではない」と思ったことでしょう。そのようなヨシユアに向かって、主なる神は
こう言われました。

「一生の間、あなたの行く手に立ちはだかる者はないであろう。わたしはモーセと共にいたように、あなたと共に
いる。あなたを見放すことも、見捨てることもない」。だから（一）「強く、雄々しくあれ」（ヨシユア一・五く六）。
「うろたえてはならない。おののいてはならない。」なぜならば（一）「あなたがどこに行ってもあなたの神、主は
共にいる」（ヨシユア一・九）。

聖書が「恐れるな」という根拠の中心にあるのは、「わたし（神）はあなたと共にいる」ということです。
私がブラジルへ行った時もそうでした。不安がありました。しかし、神が共におられるということは大きな励ましであ
りました。そして事実、神は私をブラジルで待つておられ、ブラジルでも日本でも共に歩んでくださいました。

（四）真に恐るべき方を恐れよ

今日、私たちに与えられたルカによる福音書一二章の言葉は、まさにその「恐れるな」というメッセー
ジが語られた
ところ
です。イエス・キリストの「恐れるな」という励ましには、やはり根拠がありました。

そのことをいろいろな側面から語られましたが、その第一は「真に恐るべき方を恐れよ」ということでした。つまり真
に恐るべき方を恐れることによって、それ以外の一切のものを恐れないということです。こう語られます。

「友人であるあなたがたに言っておく。体を殺しても、その後、それ以上何もできない者どもを恐れてはならない。
だれを恐れるべきか、教えよう。それは、殺した後で、地獄に投げ込む権威を持つている方だ。そうだ。言ってお

くが、この方を恐れなさい」(ルカ二二・四〇五)。

イエス・キリストは、この時、実際に命をねらわれていました。この直前の箇所、十一章後半では、イエス・キリストは、次々と批判の言葉を語られましたが(ルカ一一・三九〇五二)、その一連の厳しい言葉のあとに、こう記されていました。「イエスがそこを出て行かれると、律法学者やファリサイ派の人々は激しい敵意を抱き、いろいろの問題でイエスに質問を浴びせ始め、何か言葉じりをとらえようとねらっていた」(ルカ一一・五三〇五四)。

彼らの敵意はやがて殺意に変わっていきます。イエス・キリストがそれを察知していなかったはずはありません。それらを踏まえて、つまり自分も命をねらわれている一人であることを承知しつつ、自分に言い聞かせるようなつもりで語られたのかもしれませんが。真に恐るべき方を恐れることによって、他のものが相対化されてくる。これは生きる知恵でもあります。箴言一章七節に、「主を畏れることは知恵の初め」という言葉があります。若い方々にも、ぜひそのことを知っていただいたいと思います。

(五) 真実は必ず明らかになる

イエス・キリストは、「覆われているもので現されないものではなく、隠されているもので知られずに済むものはない」(ルカ二二・二二)と語られました。

誰がどんなに隠べいしようとするか、という事です。これは真実を覆い隠そうとする者にとつては脅威でしょう。しかし、その犠牲になつてゐる人にとつては、救いの言葉、希望の言葉ではないでしょうか。この世の力でどんなに隠そうとしても、やがて真実は明らかになるということが、私たちがこの世の権威を恐れずに生きることができるようになる根拠となるのだと思います。

そこで「ファリサイ派の人々のパン種に注意しなさい。それは偽善である」と語っておられました。「彼らを警戒せよ」ということです。

パン種というのは、ふくらし粉です。イエス・キリストは、「天の国はパン種に似ている」(マタイ一三・三三)とい

うふうにパン種という言葉をよい意味で使っていることもあります。ここではそうではありません。小さく見えても、全体に影響を及ぼしてしまふ。それは全体のよいものさえ、だめにしてしまふこともある、ということでしょう。

群衆は、「宗教的指導者の語ることに、することに間違いがあるはずがない」と思い込んでいます。群衆をその思い込み、洗脳から解放しようとするのです。「目を覚ませ。彼らを信用するな」。

皆さんは、いかがでしょうか。「牧師や先生が間違つたことを言うはずがない」。ある程度は信用して下さつていいですが、でも過信しないほうがよいかもしれません。

今日の日本キリスト教団もそういう面があるかもしれません。（なんて余計なことはいわないほうがいいかもしれません）が、少なくとも、それを注意深く、それを見守つていく責任があるのではないのでしょうか。

（六）配慮に満ちたお方

さて、イエス・キリストは「恐れるな」ということの最も大事な根拠について、ひとつのたとえをもつて語られました。「五羽の雀が二アサリオンで売られているではないか」（ルカ一二・六）。

一アサリオンは一六分の一デナリオンということです（聖書巻末の度量衡換算表、参照）。労働者の一日の賃金が一デナリオンでしたので、仮に五〇〇〇円であるとすれば、一アサリオンは約三〇〇円です。二アサリオンは六〇〇円です。一羽一二〇円ということになります。

「だが、その一羽さえ、神がお忘れになるようなことはない。それどころか、あなたがたの髪の毛までも一本残らず数えられている。恐れるな。あなたがたは、たくさんの雀よりもはるかにまざつてゐる」（ルカ一二・六〜七）。

殺した後で、地獄に投げ込む権威を持った唯一の恐るべきお方は、同時に、一羽の雀を心に留め、私たちの髪の毛までも数えておられる。それほどデリケートな配慮に満ちたお方だということです。（残念ながら、神さまは髪の毛が抜けない配慮まではしてくださらないようです。ただ髪の毛が抜けるに任せ、白くなるに任せておられる方ですが、それもすべてよいこととしてご存じのお方です。一本抜けることに、今は何本、というふうの数えておられるのでしょうか。

もつとも全部抜けた時には、私たちでも数えられますが。）

私たちは、その雀よりもはるかにまさっている、と言われます。それはそれでまた雀輕視、動物差別だと言われるかもしれませんが、いずれにしろ、ここから分かることは、私たちの主は、命の主であり、私たちの体の主であり、私たちの人生の主である、ということです。その主が私たちと共にいてくださるという約束です。

私たちを「地獄に投げ込む権威を持っている方」は、「私たちを地獄に投げ込む」とは書いてありません。実際に投げ込まないで、その代わりに、別の道を付けてくださった。独り子であるイエス・キリストを十字架にかけ、その独り子を陰府（地獄）にまで降らせることによって、私たちが陰府（地獄）に降らなくてもよい道を敷いてくださった方であると言えると思います。

（七）勇気をもって語るべきことを語る

そのお方が、私たちと共にいてくださるのです。この「恐れるな」というメッセージをしつかりと聞きたいと思うのです。そしてこの主なる神さま以外の何ものも恐れず、勇気をもって歩んでいきたいと思ひます。

私はどちらかと言えば、青年時代、教会でも神学校でも主流派で、上の権威に従順な学生であつたと思ひます。しかし牧師として歩んでいく中で、だんだん、どうもおかしいと思つたほうがいいと思ひようになってきました。教団に対してもそうです。まだまだイエス様のように大胆に、相手をかんかん怒らせるほどのことは言えませんが、おかしいと思ふことは、やっぱり「それはちょっとおかしいのではないでしょうか」くらいのことは言える人間でありたいと思ひます。

皆さんも、教会でも学校でも、どうぞおかしいと思ふことは大胆に「おかしい」と言っていただいたいと思ひます。「礼拝に不参加という形で参加する」というのは、あまりよろしくないと思ひますが、何かこんなことを言うとか、牧師や先生が怒りだすのではないか、ということはあまり心配なさらず、言うべきことは言っていたら、それをみんなで受けとめることのできる健全な共同体を形成していきましよう。